

## 「長州五傑・ロンドンへの遠い道」

### Japan2001に参加して思う山口県の実験者たち

きらめく東の島国・日本から、かがやく西の島国・英国に出掛けた。

日英両政府の主催する「Japan2001」、英国で行う日本文化の紹介という大命題を背に、山口県から「藍染めの実演セミナーとワークショップ」「国際NPOシンポジウム」を開くためだった。ロンドンに到着したのは九月の末日。今にも爆発しそうなアメリカのアフガニスタン攻撃を目前に、福岡空港からソウル経由で、北京・ウランバートル・ウラル山脈・モスクー・コペンハーゲンの上空を飛ぶ事十五時間、太陽を追い続けてグリニッチ標準時十七時、ロンドンのヒースロー空港に下りた。

霧のロンドン、さすがに小雨が降っていた。お出迎え頂いたJICA国際協力事業団ロンドン事務所長の山本愛一郎さんに九ヶ月ぶりに出会うと、旅の疲れが吹っ飛んだ感じだった。それにしても、今朝、下関を出掛けたばかり、その日のうちに到着したのは飛行機の御かげである。

今から、一三六年前、我が山口県(当時は長州藩)から、国禁を犯して伊藤博文・井上馨・井上勝・遠藤謹助・山尾庸三の五人の若者がロンドンに出向いた。長州藩は五千両(約五億円)を英国の商人に払っていた。横浜から香港、シンガポール、インドのボンベイ、ケープタウン、モロッコなどを経て、三ヶ月の後にロンドンに到着した。船の中では作業をしながら、英語の勉強を続け、船員との会話は出来たと言うから、命がけの中にも真剣さが伺えた。今でも英国では「長州五傑」と呼んで、勇気をたたえているほどである。

私のロンドン訪問は山口県「Japan2001」実行委員会の委員長として、全体の運営を見ながら三十名からの訪問団全員を無事帰国させる事であったが、強いて言えば「国際NPOシンポジウム」を成功させる事であった。

このシンポジウムの会場は「長州五傑」が学んだロンドン大学のその部屋だったのである。「エントランスホール」と呼ばれているが、ロンドン大学の正門を入ると、高く聳えるドームの塔、しっかり支える二十本近い石柱、左右に広がる三階建ての建物、その右の入り口から校舎を突き抜けると中庭がある。黒ずんだレンガで出来た校舎には翠の芝生の中庭が光っていた。黒御影の石碑、写真で見たことのある「長州五傑」の顕彰碑である。

「一八六三年及び一八六五年にUCLを訪れ、  
帰国後近代にほんの基礎を築いた先駆者達を讃える」

「一八六三年・文久三年  
伊藤博文 井上 勝  
井上 馨 遠藤謹助  
山尾庸三」

右から長州の五人の名前が彫られ、続いて二年遅れでやって来た薩摩藩士の二十二名の名前が刻まれてある。薩摩では串木野から英国に向かったとして同じような石碑がある。

「はるばると ころつどいてはなさかる」

この俳句は誰の作かは定かでないが、昔、中庭に桜の木を植えた人がいたというから、その頃から伝わったのではなかろうかと思えた。

この石碑は一九九三年、北村 汎大使が除幕したとプレートがあったので、そんなに古いものではないが、この話を聞いていた私は、「国際NPOシンポジウムの開催場所は絶対にここしかない」と心に決めてロンドン大学(UCL)と交渉を始めたのである。

「長州五傑」の顕彰碑は山口県にはない。知らなかったのか、知ってて建てなかったのか、それも定かでないが、山口県には「日本の近代化は山口県から始まった」と言っているのだから、来年にはこの運動を盛り上げなくてはならないと私はその場で心に深く刻んだのである。

さて、「長州五傑」はどこの生まれの人達だろうか。

伊藤博文は大和町の生まれで、萩で青年時代を過ごした人である。千円冊になった初代内閣総理大臣で、生家は保存され、町立の伊藤公記念館が大和町にある。井上馨は山口市湯田の生まれで、高杉晋作と藩論統一から戦い、明治新政府の骨組みを伊藤と担い、初代外務大臣となった人。井上 勝は萩市土原(ひじわら)の生まれで、鉄道の父として東京駅の駅長室の前に銅像がある。汽笛一声、新橋から横浜に列車が走った時、明治天皇に「どうぞ」と言って、天皇にご乗車頂いた人である。遠藤謹助は萩市平安古(ひあこ)の生まれで、ポンドを真似て紙幣を作った。日本最初の紙幣には、山口県人らしく「神功皇后」のお姿を描かせていた。大阪の造幣局の桜の通り抜けは彼の植えた並木道である。山尾庸三の父親は宇部市小野から製塩をするために秋穂二島に出てきて、彼はここで生まれた。今でも生まれた家そのまま残っていて、佐藤栄作総理が随分世話になったらしい。庸三はロンドンからグラスゴーに移り、造船と土木を学んで最後に帰国した。そして、今の建設大臣・工部卿と横浜の造船局長まで就任していた。

こんな事を思いながら、私は昨日(10月3日)訪れたオタリー村のことを思い出した。オタリー・セント・メアリーの教会には「アーネスト・サトウ」が眠っているはずだった。彼はイギリス・アメリカ・フランス・オランダの四国連合艦隊が下関を砲撃した元治元年(一八六四年)、クーパー提督の通訳として艦隊の旗艦・ユーリーアラス号に乗船していた。伊藤・井上が高杉の通訳をしていて、下関戦争の講和談判は三度も行われた。長州藩は負けたほうだったから、事と次第ではクーパーの言いなりにならなくてはならなかったわけだが、高杉の巧みな話術で「六連(むつれ)と部崎(へさき)に灯台を作る」ことは認めたが、彦島の租借は断ったし、賠償金も幕府につけまわってしまった。

アーネスト・サトウはその後、外交官としてアジアの各地に赴任したが、ロシアの南下が激しくなった一八九〇年代、北京の公使だった時代に、下関に領事館を開設するように本国の首相に進言し、一九〇一年(明治三四年)下関市赤間町二六番地に「駐下関英国領事館」が開設され、ブレイフェア領事が赴任している。その後、オーストリア、ハンガリー、ノルウェー、ドイツ、アメリカ、オランダが領事館を開設し、戦前までの下関は異国情緒たっぷりの国際都市として日本の三大港町として

躍進を続けていたのである。

因みに、一九九八年の関門港には英国船だけで四三〇隻も入港していたというから、八幡に製鉄所が出来て唐戸の市場は賑わい、馬関(下関)駅も開業していたのだから、100年前の下関は賑やかだったと言う事である。

オタリー村に眠るアーネスト・サトウの墓地はなかなか発見できなかった。

ロンドンのパジェントン駅を九時三三分に出発したウエスタン特急で二時間半、往復四十ポンド(約七千円)でエクセター駅まで辿りついた。まったく平坦な牧場には牛と羊と馬しか見えない牧場の風景に、低く飛んでいく雲間から太陽の光が降り注いでいた。(人間の働いている姿はどうとう見る事が出来なかった)タクシーに飛び乗って、「オタリー・セント・メアリー」と言う古都エクセターの街を通りぬけ、田舎の農道を通る事二十分、まさしく、イギリスの田園の風をふんだんに受けていた。

突然、松に似た樹木が囲い込んだ家並みに突入、「セント・メアリー・チャーチ」と言う運転手の声と共にタクシーが止まった。とにかく二十ポンド払って下りる。古い教会の塔が聳え立つ。石段を登り、十字架と平板の石柱にメモがしてある。誰もいない。教会の横の扉を開けて中に入ったが、誰もいない。日本語の説明書があったので読んで見たが、教会の歴史が書かれていて五〇〇年前に建てられた様子だった。

人影が見えたので、「アーネスト・サトウの事を知らないか」と聞いた。知らないという。教会を出て、坂道を下り、町の人に「アーネスト・サトウの事を知らないか」と聞いた。数軒の店に入っては同じ事を聞いたが、何れも「知らない」と言う。その時、物知りのような顔をした一人の男の人に出あった。再度「アーネスト・サトウの事を知らないか」と聞いた。インフォメーションがある事を知り、中には言ってみて「アーネスト・サトウの事を知らないか」と聞いた。「アーネスト・サトウは良く知っている」と言う。「そのお墓に連れて行って欲しい。出来れば旧宅も行きたい」とお願いした。

少し、太目の女性が事務所の鍵をかけるとそさくさと歩き出した。私はその後からついて行く。坂道を登り、教会の手前の住宅に入る。驚いたのは、この家の庭には日本のお寺である梵鐘があった。「OTTERYSTMARYTOWNCOUNCIL DEREKBAXTERF. S. A.」と書かれた名刺を持ったがっちりした男の人が出てき、「アーネスト・サトウの事を知りませんか」と聞いた。男は「アーネスト・サトウのことは何でも知っている」と言う。この返事に私は天にも飛び上がる気持ちだった。はるばる東洋の日本の下関から思い続けて来たことへの返事に、この男は私に神様のように思えた。オタリー村に到着して一時間以上経っていた。このままお墓参りも出来ず、帰らなくてはならないかと思うと、何事も頭の中から抜けていた。疲れた足を引きずっていた。お腹は空っぽだったはずである。しかし、眠れるアーネスト・サトウに会いたい気持ちで心が足より先走っていたのである。

鐘楼のある家から出ると坂道を登り、教会の庭に辿りついた。男は右の方に伸びた墓地に向う道を歩き始めた。広い庭の奥まった一角に十字架の形をしたお墓があった。その前で止まった彼は「アーネスト・サトウ」と言った。「SATOW 1929」だけが読み取れる。私にはこれだけ見れば充分だった。あとはゆっくり眺めることにして、お賽銭を置いて手を合わせた。「やっとここまで来れました。私が貴方の本を読んだころからして、ここに来るのは二十年来の念願でした。お参りできて嬉しいことです。私は、もう一生、貴方の事を忘れる事はありません」と心の中で呟いた。お参りが終わり、十字架を見上げると、その向こうに広がる青い空が広がっていた。

思いを達した私には故郷の関門海峡の海と空とが重なって広がっているようだった。

「アーネスト・サトウ」いかにも日本人的英国人の名前である。多くの人は「日本人ですか」と言う。日本人二世かと思わせる名前だが、純粋な英国人で生涯結婚していない。しかし、東京の麹町には日本人妻がおられ、末裔がおられると言う言だった。

私はサトウの墓参を済ませると、「一外交官の見た明治維新」という岩波文庫の上下を取り出し、男に「この本を書いた場所に連れて行って欲しい」とお願いした。「OK」と快く返事をした男は柵の外に出る入り口に向かって歩き出した。先ほどの坂道が登っていて、バスも通る広い道だった。カメラ片手に男の跡について行くとやがて丘の上を思わせる住宅街に出た。「まるで、ここは日本だ」と思った。と言うのは、生垣が洋風の建物を一戸一戸仕切っていて、英国の風情はない。生垣の中はトンガリ帽子の屋根とレンガが積まれた煙突はあるが、屋敷の仕切りは日本の田舎である。300メートルも歩いたらどうか、大きな扉が開かれ、中庭に車が数台停まっている屋敷に出会った。二階建ての三棟が続いた大きな家が聳え建っている。

「アーネスト・サトウの旧宅だ。今は三軒の家になっているが、サトウは一人で住んでいた。ここで執筆して二十二年間晩年を過ごした」と男は言った。

私はまたまた感激した。彼に差し伸べた私の右手は「感謝の握手をして欲しい」との催促だった。男の顔から誇らしげな笑みが流れた。私は左手に持っていた岩波文庫二冊を彼にプレゼントして「サンキュウ、サンキュウ」と言った。

岩波文庫を片手に男は「この辺りは山だったが、サトウが買って切り開いてから住宅地になった。彼が日本的な生垣を植えたので、この辺りはみんな真似してしまった。日本のようでしょう」と言った。

私はいろいろな角度からサトウの旧宅をカメラに収めた。「丘の上の自宅に引きこもって、東洋で勤務した長い期間の日記を取り出し、思い出を綴った」とサトウは書いているが、それが「一外交官の見た明治維新」として日本ではベストセラーになった事は多くの人が知っている。この本の中には薩摩と英国の戦い、その軍艦を配して瀬戸内海に入り、馬関戦争に臨んだ話が詳しく書かれていた。勿論、長州(山口県)の地名は至るところに出ていて、自分が幕末の中にいるような感じさえしていたから、身近に感じていたと言う言かもしれない。

その執筆の場所が目の前にある。こんな幸運は二度とないと思うと、何度もその建物を見直した。「私は用事があるので、そろそろ引き揚げましょう」と言う男に私は丁寧にお礼を言った。私はゆっくりこの坂を下りたかったから、用事のある彼に合わせて帰るつもりはなかった。「ここからは帰れます」と言うと、男は手を振って一人帰って行った。私はもう一度、アーネスト・サトウの旧宅を覗いて見た。いかにも、明治維新の思いが漂った家のように思えたから不思議だった。

こんな、思い出を作りながらの英国十日の旅だったが、道に迷いながら訪ね歩いた場所はオックスフォード、ストラドフォード、ロンドンのロイヤルカレッジオブアート(RCA)、ユニバシティカレッジオブロンドン(UCL)、グリニッチ天文台、大英博物館、テムズ川の水バスと地下鉄を乗り継いでホテルに辿りつくなど、英国は私にいろいろ体験させてくれた。最後に空港で、テロの為に銃を持った兵隊の姿に少し慌てさせられたのが、ちょっとしたハプニングだったくらいである。

